

栗田文庫 神宮文庫 寺門静軒書狀七柬

延 広 真 治

「無用之人」、寺門静軒の履跡が溟濛の彼方より全貌を現わしたは、昭和四一年一月の珍事であった。一重に秋庭太郎氏の学を継承された(三題晰攷)、永井啓夫氏の功に帰する処(寺門静軒)、学界の偉徳と讀みたい。

一方「江戸繁昌記」を中心に審究された前田愛氏には、「『江戸繁昌記』の世界」(解釈と鑑賞。四十年五月)。「寺門静軒」(国語と国文学。四十年八月)が存し、浜田義一郎氏は「繁昌後記」の一本を紹介された(「寺門静軒・成島柳北」。ひびや。三九年三月)。今此処に諸氏の驥尾に付して静軒尺牘を紹介する由縁は、嘗て永井根岸家を訪れ、転蓬の末の多幸を感じた故に外ならぬ(浜田義一郎氏「寺門静軒」。近世庶民文化。三九年十二月)。全て是、追懐の情に係る。

以下の七柬中前六は栗田文庫、後一は神宮文庫の有になる。前者は、夙に「栗田文庫善本書目」に解題が備わる。即ち「三五三、寺門静軒書簡 六通一軸。江戸繁昌記の作者静軒の洪斎宛書狀にて、筆蹟奔放その人物を想見せしむ。一、十月八日付、出版のこと。葉のこと。三家妙絶のこと等、四十行」とあり、以下順次内容摘記がある。唯だ恨むらくは、洪斎の何人なるかを明らかにし得ぬ事であり、所謂「カンナクズ風」の書体の難読を極める事である。書誌を略記する。書題簽「寺門静軒書簡」(鳥の子金粉ちらし)。全長約四米。表紙紺の楮紙。見返し無地楮紙(二二摺)。軸紫檀。藏書印一顆「栗田氏/珍藏記」(右は陰刻、左は陽刻の角印)。第一書簡より第五まで縦一五種、第六のみ一四・四種(灰色)。幅は、九〇・四。二四・四。六一・四。五三・四。四一

・三。四四。六種。一度洗った如くである。第七書簡は木村黙老自筆「聞くままの記」二十巻中「藤沢東咳与寺門静軒贈答書牘」である。東咳の書簡は、阿部緑洲に与えたもので、「伊沢蘭軒」三六二回に抄する処。従つて静軒との贈答とは言い得ぬ。現在鷗外文庫には「東咳文集」(写本)と「東咳先生文集」を蔵する。内「与阿部緑洲」は藤沢南岳発行、明治十七年四月十日刻成の、「東咳先生文集」巻十に見えるが、黙老の目睹し得たのは「僕再閱繁昌記」に始まり「不得以材掩。何如」に終る一通のみである。東咳・緑洲の關係に就いては、石浜純太郎・水田紀久氏「東咳先生周辺」(泊園。昭和三八年十一月)に備わる。緑洲に与えた書状が如何にして静軒の目に触れ得たか、又東咳宛て書状と合せて、如何にして黙老が知り得たのか。静軒はさておき、東咳・緑洲・黙老を結ぶ一点は高松藩である。即ち、東咳は讃岐の人にして後同藩使番(浪華儒林伝)。緑洲は讃岐の人世良の子(日本の篆刻)。黙老は江戸詰家老(木村三四吾氏「近世物之本江戸作者部類」解説)。しかし静軒との關係は未審。以下順次紹介したい。翻刻に当っては原文に忠実なるを心懸けたが、新旧両字体存する場合は新字に

よった。行移りは斜線によつて示した。

(一)

梁雲拜誦仕候愈／御清福奉存候然は／製本百部御届ヶ  
 ／被下造ニ落掌仕候／段々御世話之段／多々奉謝候アト  
 モ／貴宅ニ而御こらせ／被下候よし御母公／御蘭君とふ  
 へも宜敷／御承意願上候／江戸のかたハ歡喜々／社中ノ  
 ミ三十冊／くばらせ申候事貴／家よりハ一冊も他人ノ  
 御見セ無之やふ致度／尊大人御心配無之／やふニ御取計  
 も可被下候／〇／本ト八丁堀の小池ハ俗稱／失念いたし  
 候但シ石ノ／御用立カ石の間屋カニテ／五丁目ノハヅレ  
 大ヒナル壳／葉ノカンバン有之ヤハリ／小池としるし有  
 之候／焼失後いまだカリ普請／の家ニ御座候其地ニ而ハ  
 ／大家ニ候へハ小池と申バ／わかり申候事也／〇／薬カ  
 キツケ願候処態々／御薬まで沢山御恵投／被下是また多  
 々奉／謝申候／〇／三家妙絶歡喜々／急ニ申来り候間何  
 ／卒御届ヶ被下度奉／願上申候／右御礼申上度恐々謹言  
 ／早々／不乙

十月八日

此書状明後日さし出ス所へ／袍一子被尋候間相託し  
申候／

洪齋墨兄

静軒

御下

永井啓夫氏「寺門静軒」によると、武州妻沼聖天院観  
喜堂で、五、十の日に「三家妙絶・孟子」を講じている。  
六束いづれも安政七年以降、兩宣塾時代であろう。

(二)

拜啓／何事カ初マリ申候ハ、出府いたし見物／いた  
し度存居候処／此節田舎の評／判ニハ内済ニ相成／候よ  
し申候如何此かた／名主どもハ皆々地頭／へ参り居申候  
地頭一方／逃ケ参り申候／

静軒は嘉永六年ペリー来航に際し、浦賀に赴いている  
(前田氏「寺門静軒」)。桜田門外の変・和宮降嫁・坂  
下門外の変・浪士徴募。静軒は單なる好奇心からではな  
く、憂國の至情に出たものであろう。

(三)

以上／愈御清厚奉存候／然は御改心ニ而遊歴／も御見  
合セニ相成り候よし／大慶ニ奉存候左やふニ候へハ／ま  
つしはらくの間は／禁酒被成候かた宜敷／事と存申候酒  
の上より／事起り候而ハ何事も／よからざる儀と世間の  
人ハ／評判いたし候ナリ始終／の処トクト御考へ四十ま  
で／禁酒ナサレ勤慎ニ被成／度事と存候／発足之節寅藏  
ヲ／尋ね申候処るすゆへ／六篇十冊ばかり五篇ゾロヒ／  
二部飛脚屋へ届ケ／呉候やふニ申置候御序テ／有之候ハ一  
、被仰入被下度存候／且ツ文鈔板木買手有之／候へハ売  
払ヒ度よし尊大人／へも御頼ミ置申候猶また御／聞合被  
下度奉願上候隨而過日／尊大人ニはさし上置候詩鈔<sup>新註</sup>二三  
□ 隔籬聽鶯ノ詩／転句 豈無 唐土 右の通御  
直しのしるし迄ニ／奉願上候／ 無非凡鳥 俛吾焉

三月廿三日

洪齋墨兄 御下

静軒

岡田士恭が野州板倉村雷電山に、勤慎碑を建てた際、

「勤慎碑記」を草している（静軒文鈔）。寅藏は「繁昌記」の秘かな摺り師と思われる。しかし「繁昌記」板木は、既に没収されている筈である。三村竹清「本の話」に「今は昔し書肆某とかいへる者の話に、江戸繁昌記は、当時よく売れたる故、同じ板二組つくりたるを、一組絶板にされ、あとの一組残りていつまでも摺りたるなり」とある。「静軒文鈔」は文久三年十月の序。永井氏によると生前遂に板行されなかつたと言う。確かに明治七年九月になる今村亮の序には「不<sub>レ</sub>忍<sub>レ</sub>使其遺稿空<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>蠹腹」とある。しかし板木が完成している以上、少部数にもせよ摺らなかつたとは考え難い。「静軒詩鈔」（天保九年序）に、「隔籬聽鶯ノ詩」は見えぬ。「本の話」に「静軒詩篇」の識語を載す。或いは本集に存するやも知れぬ。静軒の推敲の跡を数々実見された永井氏は、「一語一句を勘案する努力型の作家」とする。静軒の文字の読み難き、竹清翁すら「僅に読み得て」とある。

(四)

愈御清福奉存候／然は御目録拝納仕候／世の形勢飛書

／御遣し被下奉謝申候／世間逐々六ヶ敷／事御勤慎專一  
ニ／いたし度存候／繁昌記二部御遣し被下難有存候六  
篇／の勘定如何ニテ候しか／失念致候刻ナリ申候ハ、  
御掛合且ツ序藏／子ヘスグニ此方ヘ届ケ／呉候やふ御申  
入置可被下候／冨史痴談ハ如何ニ／候哉是また御掛合／  
のほど御頼ミ<sup>（願）</sup>／恐々不乙／

七月廿四日

洪斎墨兄 坐下 静翁

書肆を経ずしての板行。売捌きの労苦が察せられる。秋庭氏によると、「新瀉繁昌記」は安政六年刊とされるが、やや遅らして考うべきでは無からうか。尚「痴談」は明治八年の刊行。

(五)

愈御健厚奉存候仍而／過月ハ態々御状寅／蔵かた御催  
促被下候よし／委曲承知仕候毎度／御セ話奉謝申候右ニ  
而六篇／スリ少く候ハ、前ノかたニ而もよろし／其割合  
ニ而五篇のかた／届ケ呉候やふ又々御序ニ／御申入御願

候且ツ富史ハ／社中之藏書のものも有之候か／痴談の儀  
ハ外ニ草本／無之候間寅藏かた<sup>信</sup>いたし候ハ、一  
トまづ御手元へ／とり返し御預り置被下度／<sup>信</sup>奉候右申  
上度謹言不一／

九月廿七日

歎喜への書状イツニテモ御序ニ／御届ケ御願<sup>(詳説)</sup>□上候／

洪齋志兄呈

静翁

「江戸繁昌記」六篇は、「繁昌後記」前編と同書（浜  
田氏・前掲）。永井氏は「明治十一年、門弟松本万年の  
序を加えて出版」とされる。確かに明治十年十二月にな  
る序には、「未及梓行」とある。しかし右三通により六  
篇の既に板行されていた事実が、判然とする。「文鈔」  
も同様であろう。天保十三年、大学頭林豊守より兄鳥居  
甲斐守に宛てた意見書にも、「全六篇」とある（前田  
氏・前掲）。なお六篇に関しては後に再び触れる。

(六)

愈御清栄奉存候／然は大和屋ニ而承り／候処御別居ニ相

成り／内君迷惑のよし／定而然ルベキ事ニ存候／御開業  
ニ而病客繁／栄ナラバよし格別の事／も無之候ハ、時節  
ガラ／一トまづ御喜ばしく／御同居も宜敷事哉ニ／存候  
／先達而ハ海苔御恵投／奉謝申候／御序ニ寅藏かた御／  
催促奉願上候拙老事／此節いよ／熊谷へ／出テ申候七  
月ハ出附／致し度存居申候存知／繰々可申上候／不一／

二月十四日

洪齋雅兄御下

静翁

静翁なる署名について、永井氏は文久元年刊の「活堂  
遺稿」に触れ、「この頃から静軒は専ら翁の字を用いて  
老境に入ったことを自ら認めている」。しかし「文鈔」  
序の署名に關する条には、「静軒は、年代不明の書翰の  
書名などにも静翁と記しており、初老の頃から戯れに静  
翁の号を用いていた。しかし「文鈔」の序を記した心境  
は（略）感慨をこめて静翁と署名したのであろう」とあ  
る。熊谷移居は慶応三年七二歳、即ち死の前年に当る（  
永井氏）。文面は意気盛んと言うべく、文久年間かと思  
われる。

寺門良頓首再拜。呈書藤沢先生几下。思夫今人而說今人之著。雖有用之書多忽焉。況無用戲本。世孰細說詳批以正之。或有之矣。即可不謂知己乎哉。戲著繁昌記行世。僕甚恥焉。嘗謂君子或說之乎。孰復細之。或細之乎。孰復正之。然而今則獲細說於君子。以忝其稱揚。以辱其方正。喜愧交集。汗出神灑。悵然久矣。其若此豈亦可不謂知己哉。乃謂既己為知己矣。宜陳中腸。無所隱也。拙著初篇。實一時之戲作。然戲言出乎思。鄙意所在。亦不無矣。則略構思。略改草。猶有錯置。校亦略加焉。二篇以下。並係書賈之乞。輒草率走筆。皆旬日所成。無復意在焉。數金之利。以御窮己。可愧哉。抑可喚也矣。所由若是。々所以不得逃乎識者之眼。高評疑四五篇及太平志為贗作。思豈真疑之。以此諷之。教之所在。僕雖愚亦察焉。感激不堪也。當時有告人知僕不能作詩。將詩以補拙記之遺。不可已乎。江戶人之氣質。憤懣不能置焉。我不得善。惡不能為。便叱咤成篇。恐其後之此所脫誤アルベシ嗟夫天賦所無。徐之焉美。況其如是。齒齦滅裂。大得詩家之

說。此亦一快。學者惡欲詩文之名。請知此笑之。高議所謂英俊之人。慍漸而氣萎。僕豈其人哉。詩鈔今在刻。俟成呈之。此前詩蓋或見少異。然天疎之難掩。果以知志之為真。但漸諧諱為利之為耳。近日側聞。黠儒某刻繁昌記六篇。果然贗則贗矣。文則必妙。想應于真有光。独恐知己怪以為僕猶不奉教。因預告。初鄙草之成。懼益友門生之責。秘不示。所以不乞他人序跋。其心豈負千里独步。有文齋松本秀者。僕門人也。善讀書。頗能文。乃每戲刻出。逐一是正。實與貴正合。文理固当然矣。錯置則僕不達文理之所致。如誤字。一二非不省也。然本之不拙。何苦齊末。置諸度外久矣。既往不諫來者可追此心期之已。蓋知己諷諭所在也。新刻一家言二本。奉贈乞正。願細說不惜誨。嗚呼。千里隔絕。東西異方。不知何日面謁懷。不堪眷戀之至也。閏四月十四日。(注記。句点。「此所脫誤アルベシ」は朱書)

「静軒一家言」初篇は「天保八丁酉十月刻成」、「詩鈔」は九年序。幸い九年は四月閏である。従つて本書状は天保九年閏四月十日付と判明する。当時東叟四五歳。「統浪華郷友録」(天保八年)の位置付けは、篠崎小竹

。兼康百濟。春日嶺島等に及ばぬものの、五七歳の広瀬  
筑梁を既に凌ぐ（石浜。水田氏。前掲）。而して將軍家  
茂に謁見を賜わる生涯の盛事には、猶二六年を要する。  
一方静軒は四三歳。前年夏は根岸家で易を講じ、翌年秋  
は北海道に秋場桂園を訪ねる運命にある（永井氏、前掲  
）。本書状で問題となるのは、六篇を自作に非ずと記す  
点である。明らかに第四・五・六書簡及び「意見書」と  
矛盾する。ここに考慮すべきは今一つの六篇、即ち「青  
楼之卷」である。この稀書は秋庭太郎氏により排印され  
（江戸明治時代軟文学研究 昭和四年十二月）、解題は  
「仮宅考」（三題漸攷）に備わる。摘記せば英泉風の口  
絵。売出す間際の没収で天保十二年以前の作。固より永  
井氏の踏襲する処であり、「著者名は移山閑人となつて  
おり、頭註などで静軒以外の作者の如くよそおわれてい  
るが、内容文体から静軒の著と見てさしつかえあるまい  
」と記す。しかし前田愛氏に静軒作ならずとの反論が備  
わる（書評「寺門静軒」。文学、一九六六年五月）。摘  
記せば移山閑人が静軒の別号なる証左がなく、「青楼之  
卷」の諸先生と静軒は別のグループに属するの二点とな  
ろう。今言ひ得る事は、天保九年の本書簡に上木の記載

の見える六篇は、明らかに天保十二年一月開板の「青楼  
之卷」を意味せぬ一事である。此の六篇は「繁昌後記」  
前篇を指す。然らば「亘陳中腸。無所隱也」と記しなが  
ら、何故に甚しい虚言を弄したのであろうか。六篇は巻  
末に「大坂之賊」「跳々舞」を記し、「往時北条氏之末  
有遺機事凶兆可推」と述べ、一転して「天下更益々安寧  
」と祝言を付す。何たる空々しさ。元來「繁昌記」は二  
篇で発売を差留めねばならぬにも拘らず、静軒は書続け、  
書肆は売続けたのである（前田氏・前掲）。五篇迄はと  
もあれ、徳川氏の末を暗示する以上、六篇は偽作と強弁せ  
ねば危いと感したのであろう。現に本書状も木村黙老の  
知る処となつたのである。八年十月に「折衷学特有の思  
惟方法を露わにし」た「静軒一家言」を上木し（前田氏  
前掲）、巻末に「静軒寺門先生著述目錄」を載せる。曰く  
「読書。読詩。読易。読礼。読春秋。読学庸。詩鈔。文  
鈔」。後二を除き上梓を真に志したか疑しく、刊行された  
「繁昌記」を省く。「猶不奉教」と見傲されるを極力避  
けようとの配慮に出たものであろう。眷窓の至に堪えな  
かつた静軒が東叟と相見えたのは、十八年後安政三年で  
ある。即ち「東叟先生詩存」に「静軒寺門居士西游見訪

浪華僑居賦贈」とあり、七絶二首を載せる。因みに一首掲げる。「江戸繁昌記得新。誦書昔日想其人。不圖二十餘年後。提臂一堂相共親」。既に東咳は「風流名橋競」(嘉永六年)に於いて(石浜・水田氏前掲)、後見役、百十九間の難波橋に見立てられている。徂徠学より出て泊園学を興した碩儒と(浪華儒林伝)華甲にしてなお家を成さぬ漂蕩のひと、十八年後の懸隔は余りに惨である。

「江戸人之氣質」以て如何とす。東咳の僑居は瓦町二丁目と言う(浪華儒林伝。浪華燦芳譜、石浜・水田氏前掲所収)。静軒の「大阪の宿」は平野屋甚右衛門宅であつた(浜田氏・前掲)。辞去の際の懇請を容れて静軒は、後六篇を贈つたが、「請密」と誡した(何故に写本か、板木の所在は、等は未勘)。東咳が請を同じうしたならば果して諾したのであろうか。西遊紀念たる「頼肩瓦葺」の序跋。題詩に名を連ねる九名中に、東咳の名は存せぬ。「関西大学泊園文庫蔵書書目」に就くに、「静軒一家言」「頼肩瓦葺」が存する。しかし二書、静軒より呈する処であつたか否か、現存審らかにし得ない。先年訪書の際、見出し得なかつたからである。前述の如く、本書簡の六篇は「青樓之卷」を指さぬ。この事實は、直ちに「

青樓之卷」を静軒作ならずとはせぬ。然らば「青樓之卷」の作者は何人なるか。少しく考えて見たい。既述の前田氏の反論の内、確かに移山閑人を静軒とする証左は無い。しかしグループを異にする点は、氏自ら「一、二人を除き」と付す如く、人間関係故単純には律し得ぬ。例せば「青樓之卷」に七絶を収める屈斎は又、「静軒一家言」の校字を担当し、「静軒詩鈔」を編む「静軒の愛弟子の一人であつた」(永井氏・前掲)。「青樓之卷」は口絵を有する点で他の静軒著作と異なるのみならず、三名の序を有し、結びに当り「余<sub>一</sub>、<sub>二</sub>編<sub>三</sub>、<sub>四</sub>編<sub>五</sub>、<sub>六</sub>編<sub>七</sub>、<sub>八</sub>編<sub>九</sub>、<sub>十</sub>編<sub>十一</sub>、<sub>十二</sub>編<sub>十三</sub>、<sub>十四</sub>編<sub>十五</sub>、<sub>十六</sub>編<sub>十七</sub>、<sub>十八</sub>編<sub>十九</sub>、<sub>二十</sub>編<sub>二十一</sub>、<sub>二十二</sub>編<sub>二十三</sub>、<sub>二十四</sub>編<sub>二十五</sub>、<sub>二十六</sub>編<sub>二十七</sub>、<sub>二十八</sub>編<sub>二十九</sub>、<sub>三十</sub>編<sub>三十一</sub>、<sub>三十二</sub>編<sub>三十三</sub>、<sub>三十四</sub>編<sub>三十五</sub>、<sub>三十六</sub>編<sub>三十七</sub>、<sub>三十八</sub>編<sub>三十九</sub>、<sub>四十</sub>編<sub>四十一</sub>、<sub>四十二</sub>編<sub>四十三</sub>、<sub>四十四</sub>編<sub>四十五</sub>、<sub>四十六</sub>編<sub>四十七</sub>、<sub>四十八</sub>編<sub>四十九</sub>、<sub>五十</sub>編<sub>五十一</sub>、<sub>五十二</sub>編<sub>五十三</sub>、<sub>五十四</sub>編<sub>五十五</sub>、<sub>五十六</sub>編<sub>五十七</sub>、<sub>五十八</sub>編<sub>五十九</sub>、<sub>六十</sub>編<sub>六十一</sub>、<sub>六十二</sub>編<sub>六十三</sub>、<sub>六十四</sub>編<sub>六十五</sub>、<sub>六十六</sub>編<sub>六十七</sub>、<sub>六十八</sub>編<sub>六十九</sub>、<sub>七十</sub>編<sub>七十一</sub>、<sub>七十二</sub>編<sub>七十三</sub>、<sub>七十四</sub>編<sub>七十五</sub>、<sub>七十六</sub>編<sub>七十七</sub>、<sub>七十八</sub>編<sub>七十九</sub>、<sub>八十</sub>編<sub>八十一</sub>、<sub>八十二</sub>編<sub>八十三</sub>、<sub>八十四</sub>編<sub>八十五</sub>、<sub>八十六</sub>編<sub>八十七</sub>、<sub>八十八</sub>編<sub>八十九</sub>、<sub>九十</sub>編<sub>九十一</sub>、<sub>九十二</sub>編<sub>九十三</sub>、<sub>九十四</sub>編<sub>九十五</sub>、<sub>九十六</sub>編<sub>九十七</sub>、<sub>九十八</sub>編<sub>九十九</sub>、<sub>一百</sub>編」(繁昌記)六篇すべて「不諳他人序跋」であり(東咳先生文集)、決して予告は記さぬ。静軒は「御窮己」すべく、止むを得ず筆を執るポーズを持しており、進んで戯著に予告はせぬ。更に「青樓之卷」には首書に各人の評語を載す。「秘不示」の静軒のとらぬ処である。固より「一家言」巻末には「逐次刷刻」の広告があり、「江頭百詠」には小浜大海等の序、根岸友山等の題詩。口絵二葉。松本文齋等の評に加え、村田敬所等に校者を依頼している。「一家言」は、「儒学の諸範疇の註解と批評を主にした



「書であり（前田氏・前掲）、「江頭百詠」は隅田川の風光を詠じた漢詩集である。開板に当って何の弁疏もいらぬ。殊に後者には和楽の気が溢れている。全く「繁昌記」とは異質である。しかも「青楼之巻」を覆うのは、開板を誇示する稚氣、恬として恥じぬ俗氣、而して「静軒余唾」「静軒遺臭使人掩鼻」の評語に窺える如き静軒への憧憬である。しかし静軒作ならずと繕うべく移山閑人著とし、「繁昌記」他篇と異なる体裁を採ったと駁すやも知れぬ。ならば何故にかかる小細工を弄す必要があるのであろうか。「静軒一流の諷刺やスツパスキの記事に溢れる故であらうか（三題贅放）。若し処罰を恐れたならば、「江戸繁昌記」と題し、人目を引く口絵を載せ、剩え近著予告までは不審である。「青楼之巻」は静軒作ではあるまい。では果して何人を擬せばよいのであろうか。本書板行の目的は巻末の張三・李四の会話に存し、而して「余、俟<sup>ニ</sup>編<sup>ニ</sup>刷<sup>ニ</sup>出<sup>ル</sup>」となるのである。即ち宣伝広告である。何の宣伝か、英泉の画・銀鷄「仮宅雑記」その子鉄鷄「仮宅竹枝詩」、李四編する「仮宅に関する諸家の詩集」であり、二編の予告は本詩集を指す。更に画人酒巻立兆の詩を推す。英泉・立兆いずれも銀鷄の書

に数々登場する（秋庭氏は本巻の画工を英泉に擬す）。張三・李四は銀鷄より生れた烏有先生に相違あるまい（永井氏は李四を松本月痴に擬す）。張三は銀鷄を「二世ノ名家」と言い、銀鷄を「一箇ノ名物」と評す。李四は銀鷄の書を「孝証精到」と称し、鉄鷄の詩を朗吟する。自ら著むるを怪んではならぬ。例せば「文人穴さがし」は、「イヤ銀鷄さん、此の番附の御工夫はやんやでござりやす」に始まり、自己・自著の宣伝に終始し、通説に耐えざる底の代物である。この銀鷄には又、畏敬する作家の稀觀書を翻刻する癖があり、しかも何某かの手を加えるのである。此處に志して果し得なかつた者の哀れがある。

「銀鷄 南柯乃夢」（天保四年）に「風来山人の六部集がいまだ再板ならざるとき、ばか／＼敷高価にてもとめ」と記す。万延元年「長枕褥合戦」を小本として上木した際、「頗る不消化な拙劣な文句」に改変し（花月隨筆）、大坂で開板の「飛花落葉」には、「虱の道行」に挿絵を加え、しかも「虱の道行を虱絞りの手拭で利かせた處は、どうも言へやせん」と花笠文京に言わしめている（文人穴さがし）。恐らく静軒も又、銀鷄眼中の人では無かつたであらうか。「南柯乃夢」に「江戸繁昌記とい

ふもの専行なはれて、己に三編もいでたるよしなれば、  
我これをも披見するに、いかにも名文にして、よく其穴  
を穿ち、中々常人の作とは見えぬ。然れ共これまた利を  
うるの一助にして、江のしままうでに彷彿たり。」と記  
す。「江戸繁昌記」を「我輩も感心せり」と称すると共  
に、自著「江の島まうで 浜のさゞ波」(天保四年)をそ  
れに比すのである。「江戸繁昌記」五篇に、「深川集」の  
抄録として銀鷄父子の歌を載せ、自らも一首和す。銀鷄  
の得意思ふべし。「文人穴さがし」には静軒をして「銀  
鷄子も能く滑稽なことをする人さ」と、文人三十六歌仙  
團扇の片棒を担がせている。更に「諸家出放題」は  
文晁・董斎・静軒・銀鷄に対する攻撃の書である。森統  
三氏は著者善誦主人に銀鷄を擬す(書物と江戸文化)。  
自著で自らを攻撃するのも、称揚すると同じく怪しんで  
はならぬ(秋庭氏は三木屈斎を擬し、永井氏もこの説を  
継ぐ。「愛弟子」と矛盾しないであろうか)。「南柯乃  
夢」には異類異形の大将をして「わからぬうたをよみ、  
悪筆にてかきちらし」と言わせ、「文人穴さがし」にも  
「あちこち間違が見えやす」と評させ、果ては鉄鷄の放  
蕩非難に及ぶ。銀鷄も又、「他人の視線ばかりを気にし

て生きている連中」の一人なのである(手鎖心中あとが  
き)。「出放題」に於いて自己と静軒を共に攻撃の標的  
となす心事は、「南柯乃夢」に於いて「江戸繁昌記」と  
「浜のさゞ波」を、「銭をせしめんとの策」なる点で同  
一視させると同じく、眼中の人。眼中の書に対する憧憬  
の念より発したものであろう。而して一念の凝る処、「  
青楼之巻」一巻を成したのである。この複雑な心理を解  
くには太宰治「お伽草紙」に及くはない。亀は浦島太郎  
に言う。「亀に好かれたんぢやあ意味がわるいか、しか  
し、まあ勘弁して下さいよ、好き嫌ひは理屈ぢや無いん  
だ。(略)ただ、ふつと好きなんだ。好きだから、あな  
たの悪口を言つて、あなたをからかつてみたくなるんだ。  
これがつまり爬虫類の愛情の表現の仕方なのさ」。固よ  
り銀鷄、ただの爬虫類ではない。勝海舟「氷川清話」(角  
川文庫)に就くに、「姓は今忘れたが、母を金鷄とい  
う戯作者の味噌糍があつた。(略)金鷄は、まだ二十歳  
余りの若輩であつたけれど、なかなかの才物で、たとえ  
ば『名人姓名録』というようなものを作つて(略)ねう  
ちをつけて評するから困る。名誉を好む人はあらかじめ  
金品をおくつて、その機嫌をとつておくという始末。そ

の摺物のごときも、早晚お上へ没収せられる覚悟で、二十兩のものを、早く百兩ぐらいに儲けておいた。それゆえお上にも仕方がない」。年令・所業より見て、父金鶏より銀鷄に比すが當ていよう。「青樓之巻」中の「上無湯文下無孔孟出則無謀政之主入則無語道之友」にしても深刻に解する必要があるまい。静軒の大坂の宿平野屋甚右衛門は、銀鷄「街能噂」の口絵に描かれた阪（坂トモ）上九山である（浜田氏・前掲）。或いは銀鷄の噂が出たやも知れぬ。

本稿を草すに當り、発表をお許し下さいました栗田せつ氏・栗田憲次氏、神宮文庫。閲覧させて頂きました関西大学、東京大学図書館に深謝します。また杉浦豊治・鈴木勝忠・浜田義一郎・水田紀久・武藤禎夫の諸先生には御教示、御高配を賜りました。また閲覧に際しまして中村幸彦先生、三浦善一郎氏、森川彰氏はじめ司書の方々のお力添えを得ました。殊に永井哲夫先生には見解を異に致すにも拘りませず、積年の御菟書を長期にわたり御貸与賜りました。感謝に耐えませぬ。

（本学教官）